

論文内容の要旨

1、論文の目的

石川由香里さんは、1995年に東京都立大学社会科学研究所博士後期課程を単位取得満期退学し、今日まで活水女子短期大学、活水女子大学と一貫して大学教員として教鞭をとる一方で、「家族研究」「若者研究」「嗜癖問題」「性意識研究」を継続的に行ってきた。本論文は、これまでの石川さんの研究歴に基づき、今日大きな変化に直面している母親役割が、ジェンダー秩序と階層の再生産にどのように組み込まれているのかを、「女性のセクシュアリティ」と「社会関係資本」に着目して考察し、階層構造とジェンダー秩序の変動可能性を検討することを目的とする。

筆者によれば、ジェンダー秩序は、主に、男性を市場労働に女性を家内労働に位置付ける社会構造によって再生産されているのだが、女性の家庭における無償労働の中でも特に、母親役割に関わる労働が、市場労働における女性差別的処遇を正当化する根拠となってきた。先行研究においては、母親たちは、強い母親アイデンティティを持つことによって、また階層再生産の戦略に強く包絡されることによって、積極的に母親役割を取得し、結果として、ジェンダー秩序再生産と階層再生産に大きく寄与してきたことが、明らかになっている。

しかし筆者は、現在「母親役割」や「母親規範」は、「女性のセクシュアリティの解放」「母親の就労」「社会関係資本の蓄積」などによって、揺らぎつつあるのではないかという仮説を立てる。筆者は、特に「女性のセクシュアリティ」と「社会関係資本」に着目する。論文前半では、「女性のセクシュアリティ」を主題とする。「女性のセクシュアリティ」は、母親役割とどのような関係にあるのか。筆者は、従来のジェンダー秩序からは逸脱した存在と位置づけられがちな「ギャルママ」に着眼し、彼女らのライフスタイルがジェンダー秩序と階層再生産を変えていくのかどうかを検討する。後半では社会関係資本を主な主題とする。現在、子育て支援などで母親同士のつながりやコミュニケーションが強調されていることやコミュニケーション技術の発達もあり、母親たちはかつてよりも多様な社会関係資本を持つようになってきている。このような母親の社会関係資本の増大は、はたして女性のエンパワメントし、階層再生産とジェンダー秩序再生産に変動をもたらしているのだろうか。本論文では、このような問いを明らかにする。

2、論文の構成

序章 問題の所在

第一章 日本の母親が置かれている状況

第二章 母親役割としての子どものセクシュアリティの管理

第三章 階層と母親像—育児雑誌の比較分析を通じて

第四章 子育て資本形態からみる階層とジェンダー秩序

第五章 子育てと社会関係資本

第六章 女性の就労と社会関係資本が子育てに及ぼす影響

第七章 非定型家族の社会関係資本

終章 社会関係資本はジェンダー秩序を変えうるのか

参考文献一覧

「地域社会と教育意識に関する調査」調査票

3、各章の要約

序章では、「女性の担う母親役割が、ジェンダー秩序の階層的再生産にどのように組み込まれているのかを明らかにする」という本論文の主題を述べるとともに、この主題に関わる先行研究を、(1) 母親アイデンティティ、(2) 中産階級の階層的再生産戦略 という二つの視点からまとめる。まず母親アイデンティティに関して、N. チョドローの精神分析に基づく理論や、アイデンティティの構成要素として「所属」「関係」「能力」を挙げる石川准のアイデンティティ論を挙げる。その上で、父親アイデンティティとの比較を行い、女性にとっての母親アイデンティティが男性にとっての父親アイデンティティよりもずっと重要性が高いことを論じる。他方、女性が高学歴化することは、娘の階層再生産を重視させる。母親役割を通じて女性は、階層再生産戦略にコミットするが、低成長時代においてはこのような母親への期待と責任は一層強まっていることが明らかになっている。つまり先行研究では、大まかに言えば、女性の母親役割は、ジェンダー秩序と階層の再生産を支えてきたことが、明らかになっているのである。

その上で筆者は、今日母親役割は、「女性のセクシュアリティの解放」「母親の就労」「社会関係資本の蓄積」などの要因によって変化していること、それゆえ、このような変化は、ジェンダー秩序と階層構造の変動をもたらす方向に働く可能性があることを指摘する。また、社会関係資本の蓄積と社会的不平等の関係に関しては、それが社会的不平等を是正する方向に働くのか、それとも逆に格差を広げる方に働くのかということに関し、先行研究では見解が分かれてきている。それゆえ本論文では、階層とジェンダー秩序という二つの社会的不平等に関し、母親役割の変化が、それにどのような変化をもたらすのか、また社会関係資本の蓄積が、社会的不平等に対してどのような働きをするのかを明らかにするという課題を設定し、調査データなどから検討していくことを述べる。

第1章では、文献研究や統計資料等を使用して、日本の母親たちが置かれている状況について概観する。まず統計資料から、日本の女性の労働力率はOECD諸国の平均を上回っているがM字型就労であり、再就職後の就労形態がほぼ非正規労働である点において、他国と大きな違いがあることを、示す。その結果、賃金や昇進などにおいて男女間に著しい格差がある。けれども他方において、そうした就労形態を望む既婚女性も、また多く存在する。筆者は、その理由を「母親規範」が強いこと、「3歳児神話」が学術的には「合理

的根拠はない」とされているにもかかわらず、現在でも賛同する人が 8 割以上であることを指摘する。保育環境の劣悪さや待機児童という問題もあるが、こうした問題を解決することを抑制している背景にも、3 歳児神話があるという。子育て支援の一環として「地域の子育て支援」があるが、こうした子育て支援に携わる人々の中にも「本来は母親が子育てすべき」「3 歳までは母親が」という考え方を持つ人が多く、子育て支援が打ち出されても「母親の子育て責任を軽減する」ことには結びついていないという。また女性の就労が政策的に求められる様になる一方で、「家庭教育」の重要性も強調されるようになり、「母親規範」が一層強くなっているという今日的状況もあると指摘する。

第 2 章では、全国 4 か所の、保育園・幼稚園、小学生、中学生を持つ親に対するインタビュー調査をもとに、「母親役割」「母親規範」についての人々の意識を描き出す。母親役割には、教育責任が含まれており、しかも子供の教育達成だけでなく、社会規範の習得が重視されている。なかでも、子どものセクシュアリティの管理が、重要な母親役割の一つと認識されている。子ども、特に娘のセクシュアリティの管理は、やり直しのきかない教育や職業的達成に関する社会構造と相まって、重要な階層再生産戦略の一つである。また、一部には、教育達成や、子どものしつけの良し悪し、さらには子どものセクシュアリティ管理等、母親役割の評価と、母親自身のセクシュアリティを結びつける傾向もある。「私自身が一番でなければ」と考えるような「きれいな格好をする母親」は、「産むだけの母親」であり、そうした母親の子どもたちは「奔放」であり「問題を起こしやすい」というような、そうした母親を忌避する評価が、母親同士の間で流通している。それゆえ母親の多くは、世間からの視線を強く意識し、良い母親という評価を得るために、自身のセクシュアリティを抑圧する。「女性のセクシュアリティ」は、母親役割の評価に密接な関係を持ち、ジェンダー秩序再生産戦略、階層再生産戦略の中核に位置づいていると筆者は言う。

第 3 章では、第 2 章のインタビュー調査によって、「母親役割からの逸脱」として否定的に言及されていた「セクシュアリティを前面に出す母親」たちのライフスタイルを、育児雑誌分析を通じて明らかにする。筆者は、新聞記事の分析等から、一般に「10 代から 20 代前半の比較的若い時期に出産を経験した母親たち」に対して、「児童虐待のリスクが高い」などの否定的な視線があることを示す。また雑誌などのメディアでは、出産後も独身時代同様の「ギャル系ファッション」を続ける母親たちに、「ギャルママ」という呼称が与えられている。世間からの否定的な視線は、当事者にも意識されており、2010 年には「日本ギャルママ協会」という組織が生まれ、「つらい思いをしているギャルママ」たちのための活動をすることが宣言されている。では「ギャルママ」は「伝統的な母親」と母親役割においてどの程度異なっているのだろうか。筆者はこのことを明らかにするために、育児雑誌を研究対象とする。「ギャルママ」向けの育児雑誌を、他の育児雑誌と比較することにより、その特徴を明らかにする。分析結果としては、「ギャルママ」系育児雑誌は、その記事の内容において、「母親自身の欲求充足を重視する」、「安い服を工夫して着る」、「育児に関して父親に期待しない」、「ママ友つながりを重視する」等の特徴があることが明らかになった。

第4章では、第3章で示したいくつかの異なる育児雑誌の記事内容や編集傾向を、経済資本・文化資本・社会関係資本と関連づける。「ギャルママ」向け育児雑誌『I Love mama』と、『ひよこクラブ』『Baby-Mo』等の他の育児雑誌との比較において明らかになったのは、「ギャルママ」向け雑誌は他の雑誌のように経済資本や文化資本を重視する傾向が弱く、社会関係資本を重視する傾向が強いことである。「ギャルママ」向け雑誌の中で、育児サークルやボランティア活動が広く呼びかけられており、女性同士の絆を強く意識した紙面になっている。けれども、その重視の傾向は、経済資本や文化資本に頼れないことを前提としている可能性もある。また家族外のネットワークの重視は「ギャルママ」の社会的に開かれた積極性やバイタリティを感じさせるものであるが、他方において、「父親に期待しない、できない」ことを前提としており、結果的に「育児は女性の仕事」というジェンダー秩序の再生産に向かってしまっている可能性もある。

第5章以降では、前半で見出した「ギャルママ」たちの「社会関係資本」の重視という知見から示唆された、母親たちの「社会関係資本」が社会的不平等とどのような関連性を持つのかという問いの検討に入る。まず筆者は、社会関係資本と階層再生産についての先行研究を検討し、社会関係資本が互酬的社会をもたらしという立場(R.パットナム等)と、社会関係資本が文化資本や経済資本に転化することによって階級閉鎖につながるという立場(P.ブルデュー等)に分けられることを示す。

家族と社会関係資本に関しては、地域化したネットワークが性別役割の強化につながるのかどうかに関する先行研究を検討する。その後、2014年に行った「地域社会と教育意識に関する調査」のデータを用いて、社会関係資本と階層との全体的な関連性や、性別役割との関連性を検討する。その結果、社会関係資本は概して高階層に多く分布していること、また非親族ネットワークの規模は階層的地位の高さと正の相関があることが分かった。また性別役割の変化を示す夫の家事参加度については、家族社会学において先行研究が多数あるが、家事参加と育児参加では規定要因がかなり異なることが分かった。たとえば、夫の年収が高くなると家事参加は少なくなるが、育児参加は増加する等。

第六章・第七章では、前章の結果を踏まえて、フルタイム就労の母親、非標準型家族の母親など、特定の層に焦点を当てて分析する。六章では女性の就労に伴う社会関係資本の変化が子育てにどのような影響を与えているかを検討する。データは5章と同じ調査データである。同調査で末子18歳以下のデータでフルタイム就労である母親とそれ以外の母親のネットワークを比較すると、非フルタイム就労の母親は血縁地縁中心のネットワークであるのに対し、フルタイム就労の母親はネットワークの範囲がより広い。相談等の内容を子育てに限定すると、フルタイム就労の母親は実際に子どもを預ける等の直接的な子育てサポートを自分の親や専門サービス機関にもとめるが、職場の人には間接的表出的サポートを求めても直接的サポートは全く求めている。友人・子どもを通じた知人に頼る比率も低い。それに比較すると、非フルタイムの母親は、子どもを通じた友人知人を相談相手としている割合が高く、直接的サポートもより多く得ている。性別役割との関連でみると、

「職場の人への相談」が多く、いわゆる「ママ友」への相談が少ないほど、性別役割への否定的傾向が強い。また母親の個人年収の高さは、女子の高学歴期待を高め第一子の女子に対する性別社会化への反対の傾向を強める。フルタイムかどうかという就労形態よりも、母親の個人収入の規定力が大きい。

第7章では、母子世帯、早くに出産した母親の家族、遅くに出産した母親の家族を非標準型家族とし、その社会関係資本を検討する。データは前2章と同じデータである。母子世帯に関してみると、当然ながら、配偶者・パートナーや配偶者の親が直接的・間接的サポート提供者として上がってくる率が低い。他方専門家やサービス機関の比率が高くなり、子どもを通じた友人・知人の比率が下がる。早期出産（25歳未満の出産と定義）は、母親の学歴や世帯収入に関連してだけでなく、社会関係資本の乏しさにも結び付いていた。子どもへの学歴期待も非常に低い。逆に遅く出産した主産した母親の場合、母親教育年数・父親教育年数が高くなるが社会関係資本には有意な差はなかった。

終章では、これまでの検討から、母親役割の変化が社会的不平等に与える影響についての見通しをまとめる。前半で扱った「女性のセクシュアリティの解放」による母親役割の変化は「ギャルママ」という女性同士の絆を強調するライフスタイルの提唱をもたらすなど、伝統的母親像を超えた社会的不平等を克服するような新しい母親のあり方の可能性を示唆するものであったが、その生き方は「育児をもっぱら女性の仕事にしてしまう」可能性をも感じさせるものであった。また実際の早期出産の母親たちのデータからは、学歴や収入だけでなく社会関係資本においても少ない傾向があり、階層的な不平等を克服することはかなり難しいことが明らかになった。社会関係資本における子どもを通じた友人知人ネットワークの多さは、性別役割の肯定と、職場のネットワークは逆に性別役割の否定と相関している。つまり社会関係資本の増加だけでは、性別役割の変容に結びつくと言うことは出来ず、どんなネットワークなのかによっても左右されるのである。

ここから筆者は、ジェンダー秩序が今後変化していくとすれば、女性のフルタイム就業の増加と、早期出産の母親たちに対する社会的サポートの増加が必要だと主張する。高階層の女性たちは、社会関係資本を子どもの教育的達成のために利用することで、階層再生産を果たしていく。他方「ギャルママ」たちは、「頑なまでにスタイルを維持」することで世間の非難を意識せざるを得ない状況におかれながらも、「自分たちも完璧な子育てをしている」ことを示そうとする。その結果、高階層の母親たちと同様に、「ギャルママ」たちもジェンダー秩序と階層を再生産していくのである。ここに変化をもたらすためには、育児の社会化と母親の役割軽減、そして女性のフルタイム就労が必要なのであると。

審査結果

本論文の特徴は、母親役割の変容の中で、「女性のセクシュアリティ」に関する問題に着眼し、主な考察をいわゆる「ギャルママ」に絞った点にある。従来、母親役割を含む性別役割の変容に関しては、女性の就業の有無に主な焦点が置かれ、「女性の就業と性別役割」

の関連性に関しての非常に多くの先行研究がある。しかし、それ以外の要因、特に「女性のセクシュアリティ」に関する要因については、ほとんど研究がない。筆者は、「セクシュアリティを表に出すか抑制するか」というライフスタイルの相違が単にセクシュアリティに関わる差異として位置づけられているのではなく、母親役割の達成についての評価においても非常に重要な意味を持つこと、それゆえ「ギャルママ」は、「母親役割から逸脱した存在」として扱われていることを、インタビュー調査や新聞記事などの分析から明らかにした。この点はそのオリジナリティにおいて、高く評価できる。また「ギャルママ」たちのライフスタイルを、「ギャルママ」向けの育児雑誌を、それ以外の育児雑誌と比較分析することで一定程度浮彫にしたことも、本論文の重要な成果である。

その上で母親たちが育児においてどのような社会関係資本を利用しているのかを、調査データから明らかにし、雑誌紙面上の「ギャルママ」たちの高い社会性は、早期出産した母親たちの現実ではなく、むしろ彼女らの子育てに使用する資本の乏しさを示すものであることを明らかにしたことも、オリジナルな知見として、意義がある。

けれども、いくつか欠点もある。第一に、用語の使用法が整理されていないこと。階層・文化資本・社会関係資本等、本論文の論旨の骨格を形成していると思われる主要概念について、先行研究の定義を簡単に引用するだけに留まっている。用語によっては研究者によって使用法が異なる場合も有るので、筆者自身の使用法の定義は不可欠と思われる。第二に、説明がやや不足していること。概念を用いた記述が多く、現実やデータとどのような対応があるのかについて、十分な説明がないまま論述されている箇所がいくつか見いだせる。第三に、欠点とまでは言えないまでも、「ギャルママ」のライフスタイルの特徴を、雑誌分析だけから導いており、「ギャルママ」に対するインタビュー調査や質問紙調査等を行っていないことは、やや残念である。

口頭試問・公開審査は2月8日に行われ、主に上記の点等に対して学術的討議が行われた。その中で論文提出者は、真摯に問題に向きあい、今後の研究において本論文で残された課題を引き続き検討していくことに強い意欲を示した。このような事から、審査委員一同は、石川由香里さんに博士の学位を授与することが適当であると、判断した。